

Title	中世歌合諸本の研究(六ノ上)：『歌合貞永元年八月十五夜』校本
Sub Title	Study of Medieval Poetry Contest Records (6a) : The Uta-awase of Jyoei 1.8.15
Author	佐々木, 孝浩(Sasaki, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2002
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.37 (2002. ) ,p.155- 198
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20020000-0155">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20020000-0155</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 中世歌合諸本の研究（六ノ上）

——『歌合 貞永元年八月十五夜』校本——

佐々木孝浩

はじめに

寛喜二年（一二三〇）七月頃より勅撰集の企画があったことは、藤原定家の日記『明月記』（同月五・六日条）によって明らかだが、その定家が後堀河天皇より勅撰集撰進の下令を受けた、貞永元年（一二三二）六月十三日を以て、勅撰和歌集による和歌史区分における、「新勅撰集時代」の幕開けと称することは許されるであろう。

承久の乱以前から歌壇の庇護者であり、また新しい勅撰集の実質的な立案者でもあった九条道家は、早速翌月七月には自身や息教実を含め、当時の主要な歌人二十二人を集えて、十題百

十番からなる歌合（所謂「光明峰寺撰政治家歌合」）を催し、八月十五夜にも、やはりかなり重複した二十二名により、「名所月」題三首の三十三番からなる歌合を主催している。これらが、定家に撰歌材料を提供することをも目的とした催しであったことは疑いなく、新勅撰集時代の本格的な始動も、道家の手によってなされたのである。

この二つの歌合は、前者の判詞を主対象とした論文がある（鈴木儀一氏「光明峰寺撰政治家歌合判詞考」『駒沢国文』1、昭34・11）程度で、従来あまり注目されることもなかったものが、特に後者の判詞は比較的詳細で、『和歌大辞典』でも「晩年の定家の歌観をうかがう好資料」（細谷直樹氏）と評されて

おり、また『新勅撰集』に四首が入集し、後の四代の勅撰集にも八首も撰入されている様に、成立当時からの評価も低くなかったものと思われ、名所歌合という形式の特異さも含めて、本格的な研究に値する対象であると思われる。そこで、本稿ではこの『歌合 貞永元年八月十五夜』について、書誌学的事項を中心に考察を加えてみたいと考える。

ただし紙幅の関係により、概要の確認や、系統分類の考証、歌合史上における位置付け等の、具体的な考察は本誌次号に譲り、本号では、次号での考察の前提として、調査しえた現存伝本の系統分類の提示と、各伝本の書誌的な事項の確認を行い、併せて末尾に校本を附した。

## 一 現存伝本

『中世歌合伝本書目』に掲載の本歌合の伝本は、写本が二十二本、版本が歌合部類と群書類従所載のものを一本と数えて三本の、計二十五本である。本稿ではこの内、群書類従本の転写本であると思われる、東京大学国文学研究室所蔵『歌合類纂』所収本（書目で国書総目録に拠るとされる東大本は、これを指すものと考え）と、版本歌合部類の写しであると思われる、

久松国男氏蔵『歌合部類』所収本、さらに『歌合部類』の零本である高城功夫氏蔵版本の三本を除き、新たに確認できた、慶應義塾図書館蔵本と篠山市青山文庫蔵本を加えた、二十四本を考察の対象とした。

この二十四本は、冒頭の作者一覧や末尾の成績一覧の有無など、一見したところの大きな差異が存しているが、これらは後天的というか、流布の過程で付加されたものと考えられ、本文自体には、異本と称しうる存在は認めがたい。しかしながら、その本文の細かな異同はかなりの数に上るのである。

『新編国歌大観』第五巻で、本歌合を担当された佐藤恒雄氏は、調査された十数本を一系として、本文細部の特徴から二類に分けておられる。本稿の調査結果でも、この二分は妥当であると認められたが、一覧の有無などの特徴や本文の類同性から、両類共に更なる下位分類が必要と考えられたので、種を分かった。それでも同種の内での細かな本文異同は少なくないのだが、あまり細かな分類も無意味になるので、ここまでで留めた。

両類・各種間の関係についての具体的な考証は次稿に譲り、

以下の書誌の確認や、校本を利用する際の参考の為に、次に系統分類一覧を掲げておきたい。東京大学附属図書館蔵本は抄出本であるので、別掲した。また、一字下げの伝本は、直前の伝本の転写本であることを示している。猶、校本において、新編大観本とは異なる類に属する伝本を底本に用いたため、新大観での第一類が本稿では第二類となっていることをお断りしておきたい。

## 第Ⅰ類

### 第一種

前田育徳会尊経閣文庫蔵(二三・五六)本

明治大学中央図書館蔵(二〇一・一八七)本

慶應義塾図書館蔵(JL・2A・1087)本

### 第二種

久保田淳氏蔵本

高城功夫氏蔵本

水府明徳会彰考館文庫蔵(巳一三・〇七二七〇)本

高山郷土館蔵本(和歌部・四五)

賀茂別雷神社三手文庫蔵(西・三四七)本

山口県立図書館蔵(今井似閑本一二九)本

宮内庁書陵部蔵御所本(五〇一・五九六)本

宮内庁書陵部蔵御所本(五〇一・五九七)本

## 第Ⅱ類

### 第一種

東海大学図書館桃園文庫蔵(桃・三一・二四)本

### 第二種

熊本大学附属図書館永青文庫蔵(一〇七・三六・七)本

神宮文庫蔵(三・一〇五六)本

名古屋蓬左文庫蔵(六一・二六)本

宮内庁書陵部蔵鷹司本(二六六・三四九)本

島原図書館松平文庫蔵(一三八・七七)本

国立公文書館内閣文庫蔵(二〇一・一八七)本

### 第三種

篠山市青山文庫蔵(二三四)本

### 第四種

歌合部類所収本

群書類従卷百九十八和歌部五十三哥合十九所収本

第五種

祐徳稻荷寄託中川文庫蔵(六・二一・二五〇)本

祐徳稻荷寄託中川文庫蔵(六・二一・二八五)本

抄出本

東京大学附属図書館蔵(E三一・一六四二)抄出本

続いて、以下にこの一覧の順に各伝本の書誌を記し、次号で考察する本文に関する事柄を除いた、書籍としての特徴や伝来等について整理しておきたい。

前田育徳会尊経閣文庫蔵本(一三・五六)本

〔江戸前期〕写

一帖〔略称〕〔尊〕

綴葉装。縹色艶出表紙(二五・四×一八・四種)。左肩洗白色題簽(一七・六×三・三種)に「歌合」と墨書(右辺や下部に擦消痕あり)。またその右傍にやや新しい紙片が貼付され「貞永元年／八月十五夜」とある。内題は「詞合 貞永元年八月十五夜」。料紙は淡香色の鳥の子紙に似た斐楮交漉紙。墨付一八丁(二折、第一折六紙・第二折五紙、外側一枚は前後の見返し

となる)。裏始り。遊紙は前後各一丁。字面高さ約二〇・九種。每半葉一〇行、歌一行書。奥書識語なし。印記は「前田氏／尊(經閣／圖書記)(前遊才中央・方朱)。

表紙右下に小紙片が貼付され「北某舊／藏ノ一」とある。本文の様々な箇所(薄茶色の不審紙がびっしりと貼られ、またその不審紙が貼られた行の上部に料紙からはみ出すようにして同色の細い付箋が貼られているが、本文の貼付箇所を校本で確認すると、完全に一致するものは確認できないものの、永青文庫本を始めとするⅡ類に属する諸本との異同箇所とはほぼ一致している。異文の書入れは全くないが、この不審紙は他類本と校合を行った痕跡を示すものと思われる。

明治大学中央図書館蔵(二〇一・一八七)本

〔江戸前中期〕写

一冊〔略称〕〔明〕

袋綴。鳥の子色地亀甲繫文金欄表紙(二三・五×一七・五種)。中央やや右寄りのやや新しい貼紙(一二・二×四・三種)に「番号二号ノ内／貞永元年八月／十五夜歌合」(別筆)とあるのみで、題簽剥落痕などは確認できず。見返しは金小切箔・砂

子散らしの布目鳥の子紙。内題は「歌合 貞永元年八月十五夜」。料紙はやや薄手の斐楮交漉紙に雲母引し、丁替りで、金泥で草木・鳥・遠山を描いたり、金銀の砂子を散した豪華なもの。墨付二二丁・裏始り。遊紙なし。字面高さ約一九・四種。每半葉一〇行、歌二行書。奥書なし。印記は①「明治大／學圖書／館之印」(一オ中央上部・大方朱)・②「明大図書館」(一ウ右下・長方朱)・③「明大」(九ウ喉中央・小丸朱)、他に明治二十七年二月四日受入れを示す朱印あり。表紙に「公爵毛利家文庫」の蔵書標あり。

蔵書標が示す通り、長州藩毛利家旧蔵本。同家旧蔵本は、山口県防府市の毛利博物館に収められる他、明治大学附属図書館に約六千九百冊が所蔵されている。

慶應義塾図書館蔵 (JL・二A・一〇八七) 本

〔室町初期〕写 一冊〔略称「慶」〕

袋綴。丸錦を格子で繋いだ文様の藍色緞子表紙(二八・八×二一・六種)。外題はない。見返しは金切箔・砂子・野毛散しの鳥の子紙。内題は「詞合 貞永元年八月十五夜」。料紙は斐楮交漉

紙で全丁裏打ち済み。墨付二二丁・表始り。遊紙なし。字面高さ約二三・六種。每半葉一〇行、歌二行書。奥書なし。印記は①「赤堤居」(一オ右下・長方朱)・②「慶應義塾大學圖書館」(①の右・長方朱)。古い杉箱入り。蓋中央に「二條家為重卿真跡極札有」と墨書。

書写の古い歌書の袋綴本として注目できる一本である。大振りな料紙に能筆の手でゆつたりと書されており、善本であることは疑いもないが、惜しくも第二丁目を欠き、「一番」から二番右作者迄が無いので、校本の底本とはしなかった。箱書に示された極札は見当たらず、何れの古筆見の鑑定とも知られない。為重は、二条為世の孫で為冬の子。為遠頓死後に『新後拾遺集』の撰集を受け継ぎ、至徳二(元中二)年(一三八五)に六十一歳で薨じている。その真跡は、熱田本和歌懐紙集中の五枚他の懐紙や、数枚の短冊等が知られている。この他にも、『慕婦絵詞』巻八の詞書も為重の筆と識語に見えているのだが、『続日本絵巻物大成4』(中央公論社、昭60)で神崎充晴氏は、この詞書の筆跡を懐紙と比較してほぼ同筆と判定しておられる。本書の筆跡を、『慕婦絵詞』詞書や、『珠玉の書 短冊手鑑の世

界」(MOA美術館、平14)に図版がある、『続眺望集』に模刻されたものの原短冊と比較してみたが、全くの別筆であった。

伝為重筆の名物切としては、新古今集を書写した「道也切」が著名であるが、これもさらなる別手の様である。その他為重との極札を有するものは、総じて丸みを帯びたどちらかと言えばふにゃふにゃした印象の手のものばかりだが、本書のそれは文字が縦長で、鋭さと力強さの備わった筆致であり、何故に本書が為重筆と極められたのかいささか不審である。

ところで本歌合の伝為重筆本という点、『弘文荘待買古書目16』(昭23・7)の「七五 貞永元年名所月歌合」が注意される。戦後のこととて図版がないのは惜しまれるが、伝為重、「大型本、大字達筆」、そして何よりも「可惜卷首一葉缺」等と解説にあること等の共通性により、この記載は本書のものである可能性は高いであろう。但し、「二帖」・「二首一行書」とあるのは重要な差異である。しかしながら、蔵書印①により萩谷朴氏旧蔵であることが判り、時期的にも萩谷氏が弘文荘から購入されても不思議ではなく、ここは目録の間違いと認めて良いのではないだろうか。

久保田淳氏蔵本

〔江戸前中期〕写

一冊〔略称「久」〕

袋綴。丁子茶色表紙(二〇・五×一七・〇糎)。左肩に打付けで「貞永元年八月十五夜歌合／題名所月三首」(別筆カ)と墨書。内題は「歌合 貞永元年八月十五夜」。料紙はやや薄手の斐楮交漉紙。墨付一九丁・表始り。遊紙なし。字面高さ約一六・四糎。每半葉一〇行、歌二行書。奥書・印記なし。小口書「貞永元 八月歌合」。

高城功夫氏蔵本

〔江戸中期〕写

一冊〔略称「高」〕

袋綴。支子色表紙(二〇・九×二三・三糎)。中央の上部を紫に下部を浅葱色に染めて雲紙風にした題簽(一六・四×三・六糎)に「貞永元年八月十五夜詞合卷」(同筆)と墨書。内題は「詞合 貞永元年八月十五夜」。料紙は薄手の三椋紙。墨付三二丁(裏見返し含む)・裏始り。遊紙なし。字面高さ約一五・四糎。每半葉六〜九行、歌二行書。奥書なし。印記「高城／蔵書」(一才右下・方朱)。

頁により行数が異なり、能筆が闊達に筆を走らせたような書写である。

水府明徳会彰考館文庫蔵本（巳一三・〇七二七〇）本

〔江戸前期〕写カ 一帖〔略称「彰」〕

原本未見。国文学研究資料館の紙焼写真によって本文の確認をした。写真によって判明する書誌事項を記しておきたい。

綴葉装。榊形本。雲紙表紙。外題は「歌合貞永元年八月十五夜判者定家卿」

（別筆）と左肩に墨書。内題は「哥合貞永元年八月十五夜」。墨付一六丁（二折、第一折六紙・第二折三紙、外側一枚は前後の見返しとなるカ）・表始り。遊紙なし。每半葉二三行、歌二行書。奥書識語なし。印記は「彰考館」（一才右下・瓢型）。

二番以降は「番・左・右」の文字を「一」で代用させている。ままあることではあるが、現在まで確認した本歌合諸本中では本伝本のみ。第一折の中央に綴糸の束が見えるのはやや不審。第二折の喉元辺は虫損がやや激しいので、綴じ直して現状のようにしたものか。

高山郷土館蔵（和歌部・四五）本

〔江戸中後期〕写カ

一冊〔略称「高」〕

原本未見。国文学研究資料館の紙焼写真によって本文の確認をした。写真によって判明する範囲で記し、正確な書誌は追って報告したい。

〔包背装〕。紙表紙。左肩に「月調合」（同筆カ）と打付け書き。内題は「調合貞永元年八月十五夜」。墨付一七丁・裏始り。每半葉一〇行、歌二行書。奥書なし。印記「香木／園印」（表紙左下）。

印記より、飛騨高山の薬種商で本居宣長門の国学者であった、田中大秀（弘化四年（一八四七）没・七十一歳）の旧蔵であると判る。裏表紙に『古今和歌集』『伊勢物語』等で著名な「きみやこし」・「かきくらす」の贈答等が記されている。あるいは反故を転用したものか。

賀茂別雷神社三手文庫蔵（西・三四七）本

〔江戸前中期〕写

一冊〔略称「三」〕

袋綴。水色表紙（二二・〇×一六・九糎）。左肩の鳥の子紙



題簽（一七・〇×二・九糎）に「〇恋十五首歌合」（「〇」は青色、薄墨で見消ち）とあり、左傍の余白に「歌合 貞永元年八月十五夜」とやや小字の薄青墨で書き入れる（共に同筆）。内題は①

「戀十五首歌合 建仁二年九月十三夜水無瀬」（「水無瀬」異筆の薄墨）

②「譚合 貞永元年八月十五夜」。見返しの右肩（貼られた表側の左肩）に、本文同筆で「恋十五首歌合」とあるのが透けて見える。

料紙はやや薄手の斐楮交漉紙。墨付①四二、②一九（裏見返し含む）の計六一丁（①②共に表始り）。遊紙なし。字面高さ①

約一八・〇、②約一八・九糎。每半葉二一行（②十五番判詞の丁より一〇行）、歌二行書。奥書なし。裏見返し裏の剥がれた

糊代部分に「二易 十二 六十一」とあり（「六十一」は墨付け丁数か）。印記は「今井／似閑」（一才右下・方朱）。「上鴨奉

納」（前印上・瓢型朱）。「賀茂三手文庫」（一才右上・長方朱・陰刻）。

①②は筆を替えた同筆であろう。やや速筆の印象がある。表紙右肩と背上部に「十三」と墨書あり。裏見返し（本文最終）

は紙が二重になっているが、中の一枚は本来裏見返しとなるはずのものであったか。京の国学者今井似閑（享保八年（一七二

三）没・六七歳）が死の二か月前に奉納した写本群の内の一冊。次の山口県立図書館蔵本の親本。

山口県立図書館蔵（今井似閑本二二九）本

〔江戸中期〕写

一冊〔略称「山」〕

袋綴。茶色表紙（二五・七×一九・七糎）。左肩の題簽（一六・八×三・四糎）に「恋十五首歌合」（別筆力）とある。内

題は①「戀十五首歌合 建仁二年九月十三夜水無瀬」、②「譚合 貞永元年八月十五夜」。料紙は薄手の斐楮交漉紙。墨付①四七、②二〇の

計六七丁（①②は共に表始り）。遊紙各二丁。字面高さ①約二〇・五、②約二〇・六糎。每半葉一〇行、歌二行書。奥書なし。

底本との校合によると思われる朱訂あり。印記は「明倫／館印」（篆書・一才右上・方朱）。「嘉永三改」（裏遊ウ左上・分銅型朱）。

「安政七改」（一才・長方二重椀朱）。「明治十四年改」（一才・長方朱）。表紙右肩に「第八門乙六（朱）／辰九拾式（墨）」と打付書きあり。

藩出入りの商人でもあった今井似閑の蔵書を、長州藩が藩校明倫館の蔵書の一つの柱とすべく写させた写本群中の一冊。現

在同図書館には二百九部四百二十六冊の転写本が所蔵されている。

宮内庁書陵部蔵御所本（五〇一・五九六）本

〔江戸前期〕写 一冊〔略称「御」〕

袋装。鳥の子色地水色花七宝唐草に蝶蜻蛉文雲母刷表紙（二八・三×二〇・八糎）。左肩に打付けで「歌合 貞永元年八月十五夜」と墨書（別筆力）。内題は「哥合 貞永元年八月十五夜」。料紙はやや薄手で艶のある上質な斐楮交漉紙。墨付一五丁・表始まり。遊紙は前後各一丁。字面高さ約三二・二糎。每半葉一〇行、歌一行書。奥書識語なし。印記は「圖書／寮印」（一才右上・方朱）。

三十番右歌に一箇所異本注記あり。同じく書陵部御所本の「五〇一・五九七」とは、字配りや漢字仮名の宛て方・字母等に至るまで良く似ており、先の注記等も一致しているが、校本を見すれば明かな様にこちらが親本であると思われる。

宮内庁書陵部蔵御所本（五〇一・五九七）本

〔江戸中期〕写 一冊〔略称「書」〕

袋装。鳥の子色地に茶色と鼠色の斜格子刷毛引表紙（二九・三×二一・一糎）。左肩に打付けで「哥合 貞永元年十五夜」と朱書（別筆力）。内題は「哥合 貞永元年八月十五夜」。料紙はやや薄手の斐楮交漉紙。墨付一五丁・表始まり。遊紙は前後各一丁。字面高さ約三三・〇糎。每半葉一〇行、歌一行書。奥書識語なし。印記は「圖書／寮印」（一才右上・方朱）。

前記した御所本「五〇一・五九六」本の転写本であろう。

東海大学図書館桃園文庫蔵（桃・三一・二四）本

〔鎌倉末南北朝〕写 一帖〔略称「桃」〕

綴葉装。後補瓶覗色地縹色横細縞の間道表紙（二五・九×一四・五糎）。外題内題共になし。見返しは布目金紙（前のみ・現状剥落・後ろは失われたか）。料紙はやや薄手で楮が多めの斐楮交漉紙。二折（各七枚・外側は表紙と見返しに挟み込まれていたはずだが、現状は遊紙の如き状態）、墨付二一丁・表始まり。遊紙前一丁・後四丁（本来の表紙挟み込みの紙は含まず）。字面高さ約一三・七糎。每半葉九行、歌二行書。奥書なし。本

来裏表紙と裏見返しの中にあつたはずの紙の裏左下に万年筆で「大〇ユタ／昭和六、二一、廿五―」とのメモ書きあり。印記はなく、表紙右下と見返し右下に桃園文庫の蔵書標がある。

虫損が全くなく、状態も良いので、『桃園文庫目録 中巻』

(東海大学附属図書館、昭三)に「江戸初期写」とあるごとく、新しく見えるが、筆跡や墨色、紙の質等からして、相当の古写本であると思われる。司書の方に問い合わせたところによると、特別な箱や帙、極札等の附属の資料なども無いそうである。昭和初期頃に売られるまで、所蔵先を殆ど変えず、環境の良い秘庫に眠り続けていたものかもしれない。ともかくも、確認し得た諸本中では、慶応義塾図書館にも先立つ最古写の本である。ろろ。

熊本大学附属図書館永青文庫蔵(一〇七・三六・七)本

〔近世初〕写 一冊〔略称「永」〕

袋綴。縹色表紙(二五・七×二〇・一糎)。左肩の丹色地金泥龍文題簽(一四・九×三・二糎)に「貞永哥合」(別筆)とある。内題は「歌合 貞永元年八月十五夜」。料紙はやや厚手の斐楮

交漉紙。墨付一九丁・裏始り。遊紙前一・後三丁。字面高さ約一九・五糎。每半葉一〇行、歌二行書。奥書・印記なし。一七丁袋中に「墨付拾九枚」と記した小紙片あり。

『新編国歌大観』の底本。末尾に幽齋署名を有する写本群と同様の装丁を有する一冊。この装丁で幽齋署名の無いものは書き忘れかと思えるほどに珍しい。またこの一群中には、慶長五年(一六〇〇)四月頃に「勅本」(禁裏御文庫本)を写した旨の奥書が存するものが少なからずあるのだが、本書の親本については不明である。

神宮文庫蔵(三・一〇五六)本

〔江戸前中期〕写 冊〔略称「神」〕

袋綴。後補淡灰色格子文刷毛引表紙(一九・五×一三・三糎)。左肩に「名所月歌合 完」(別筆)と打付け書き。扉は汚れ方等より仮綴時代の共紙表紙と思われる。左肩に「名所月哥合 貞永元年八月十五夜」(同筆)とある。内題は「詞合 貞永元年八月十五夜」。料紙は薄手の斐楮交漉紙。墨付二六丁・裏始り。遊紙なし。字面高さ約一七・〇糎。每半葉八行、歌二行書。奥書なし。朱訂

少々あり。印記は、①「謹思／堂」（一才右下・円朱）・②「天明四年甲辰八月吉旦奉納／皇太神宮林崎文庫以期不朽／京都謹思堂村井古巖敬義拜」（裏見返し中央下部・長方代繕）・③「林崎／文庫」（扉才右上・短長方代繕）・④「林崎文庫」（①左・長方朱）。「名所月歌合」の見出し紙あり。

京の呉服商菱屋新兵衛ごとと謹思堂村井古巖が、内宮の権欄直蓬葉尚賢による林崎文庫への書籍の寄付の呼びかけに応じて、天明四年（一七八四）に奉納したその蔵書二千六百余部の内の一冊。

名古屋市蓬左文庫蔵（六一・二六）本

〔江戸前期〕写カ

一帖〔略称「蓬」〕

原本未見。国文学研究資料館の紙焼写真によって本文の確認をした。写真によって判明する範囲で記し、正確な書誌は追って報告したい。

綴葉装。菊花文刷布目紙表紙。左肩の雲霞文題簽に「名所の月哥合」（同筆）と墨書。見返しは布目金紙か。内題は「詞合貞永元年八月十五夜」。料紙は金泥で下絵を施した鳥の子紙カ。三

折・墨付二二丁・表始り。每半葉一〇行、歌二行書。奥書・印記なし。

尾張徳川家旧蔵らしい、諸伝本中最も豪華な装丁のものであるようだ。

宮内庁書陵部蔵鷹司本（二六六・三四九）本

〔江戸前期〕写

一冊〔略称「鷹」〕

袋装。淡茶色地浅葱色花唐草文刷表紙（二五・四×一九・五糎）。左肩の題簽剥落痕（約二〇・〇×三・七糎）の上から「貞永元年歌合」と後筆で墨書。内題は「歌合 貞永元年八月十五夜」。見返しの右肩（貼られた表側の左肩）に、本文同筆で「貞永元年歌合」とあるのが透けて見える。料紙はやや薄手の斐楮交流紙。墨付一九丁・裏始まり。遊紙はない。字面高さ約一九・五糎。每半葉一〇行、歌二行書。奥書識語なし。印記は「鷹司城南／館圖書印」（一才中央・長方朱）。

裏見返し左下をめぐった裏側に、良く見かける符丁の書き入れがあることからすると、鷹司家で書写されたものではなく、

古書肆を経たものであると思われる。

鳥原図書館松平文庫蔵(一三八・七七)本

〔江戸前期〕写 一冊〔略称「鳥」〕

袋綴。縹色表紙(二七・四×二〇・〇糎)。左肩の鳥の子紙題簽(一九・三×三・〇糎)に「貞永元年八月十五夜哥合」(別筆)とあり。内題は「謔合 貞永元年八月十五夜」。料紙はやや薄手で表皮の混入が目立つ斐楮交漉紙。墨付一八丁。遊紙前後各一丁。字面高さ約一九・二糎。每半葉一〇行、歌二行書。奥書なし。印記は「尚舍源忠房」(一八ウ左下・長方緑)。「文／庫」(前印下・横楕円紅緋)。

印記の主松平忠房については説明は不要であろう。その没年は元禄十三年(一七〇〇)であるので、一応それ以前の書写であろう。

国立公文書館内閣文庫蔵(二〇一・一八七)本

〔江戸前中期〕写 一冊〔略称「内」〕

袋綴。濃茶色表紙(二七・三×一九・一糎)。左肩の支子色

鳥の子紙題簽(一七・七×三・八糎)に「貞永元年八月十五夜歌合全」(別筆)とあり。内題は「謔合 貞永元年八月十五夜」。料紙はやや厚手の斐楮交漉紙。墨付二四丁・裏始り。遊紙前後各

一丁。字面高さ約二〇・七糎。每半葉八行、歌二行書。奥書なし。印記は「太政官／文庫」(前遊紙才上部中央・方朱)。「日本／政府／圖書」(一ウ右上・方朱)。表紙に「太政官文庫」〔内閣文庫〕等数種の蔵書標あり。小口書「貞永元歌合 全」。

紅葉山文庫本。背を除いた三方に大きな水染みあり。一番右に同筆(但し使用する筆は異なるか)異本注記あり。三十三番判詞途中の改頁箇所で中断している。あるいは書き忘れたものか。

篠山市青山文庫蔵(二三四)本

〔江戸前期〕写・南可校合識語 一冊〔略称「青」〕

袋綴。淡茶色横簀目表紙(二五・八×一九・五糎)。左肩の紅色題簽(一四・五×三・〇糎)に「謔合 貞永元年八月十五夜」

(別筆カ)とあり。内題は「謔合 貞永元年八月十五夜」。料紙はやや薄手の斐楮交漉紙。墨付二二丁・裏始り。遊紙前後各一丁。

字面高さ約一九・四糎。每半葉一〇行、歌二行書。二二丁ウ左下に「一校了(南可印)」と墨書。印記なし。

南可による校合書入れ若干あり。南可は、俗姓伊藤、慶長十七年(一六一二)に生まれ、元禄四年(一六九二)八十歳までの生存が確認できる。良玄とも称し、賀茂に隠棲した僧侶歌人であったが、大坂城代を務めた小諸五万石の藩主青山宗俊に認められ、同家の歌学方となり、大坂、ついで宗俊の転封先である浜松に住した。家集に『弄璞集』がある。青山家は丹波亀山を経て丹波篠山に封ぜられて維新を迎えるが、同家の蔵書は、篠山市青山歴史村内の青山文庫と、兵庫県立篠山鳳鳴高校の青山文庫に分蔵されている。その内の歌書類の多くは、この良玄の監督下に収集や書写が行われたものと思われ、本書と同様な南可の識語と朱印が認められるのが目立つ。

以上のことからすると、本書の書写も、宗俊が大坂城代となった、寛文二年(一六六二)から、元禄初年頃までになされたかと考えられる。

猶、南可については、上野洋三・中西健治氏『弄璞集 本文と索引』(和泉書院、平5)や日下幸男氏『近世古今伝授史の

研究 地下篇』(新典社、平10)を、青山家旧蔵歌書類と、南可識語の状況については、財団法人青山会編『青山会文庫所蔵和漢書分類目録』(平6)を参照願いたい。

#### 歌合部類所収本

刊

合一冊(略称「部」)

刷と保存状態が良い、慶應義塾図書館蔵の二十冊本(JL・二A・一一四〇・二〇)に拠ったので、本歌合の収載される第十二冊のみの書誌を記す。瓶覗色地布目艶出の元表紙(二七・五×一九・五糎)。左肩刷題簽に「歌合部類光明峯寺殿名所月十二」とあり。内題は①「光明峯寺撰政家歌合 貞応元年七月」・②「調合 貞永元年八月十五夜」。墨付①三一・②二二の計四三丁。印面高さ①約二一・七・②二一・八糎。半面共に作者一覽一〇・歌合本文二三行、歌二行。版心丁付「光明峯 一ノ二(三)三十二終」・「貞永 一(十二終)」。第一冊目録最終丁裏に「貞享二年龍集<sup>乙</sup> 丑八月日 / (二行アキ) / 洛陽書林<sup>二</sup>口伊豫<sup>一</sup> 西村九良右衛門」<sup>二</sup>との刊記がある。印記は各冊に「稜威 / 廼舍」(長方朱印刷)・「稜威 / 廼舍 / 藏書」(方朱)・「慶應義塾大学圖書館藏」(長方朱)を捺す(前二印はままた文不明印が捺し重ねてある)。各冊

表紙にはその冊の歌合の歌題が墨書され、また各冊裏見返右下には「持主小澤治兵衛」との署名がある。

本歌合には、集付の他異本注記が少々あり、作者一覽に勘物がある。

蔵書印より、信濃二宮矢彦神社神主で、平田鉄胤門の国学者である倉沢清也（大正十年（一九二〇）没・九〇歳）の旧蔵書と知られる（新編蔵書印譜・和学者総覧等）。

#### 群書類従巻百九十八和歌部五十三哥合十九所収本

刊

合一冊（略称「群」）

詳しい書誌事項は略す。内題「歌合 貞永元年八月十五夜」。版心丁付「六十三〜七十七了」。半面一〇行。歌一行。末尾に本奥書・識語はない。集付の他、異本注記少々あり。また作者一覽に勘物がある。以下の検討や校合に際しては、慶應義塾図書館に寄託された田安家蔵本（九八・一・六六七）に拠った。

【大日本史料】五一八の翻刻の底本である。

祐徳稱荷寄託中川文庫蔵（六・二一二・二五〇）本

（江戸前期）写

一冊（略称「祐」）

袋綴。瓶覗色艶出表紙（二七・一×二〇・一糎）。左肩に「貞永元／八月十五夜歌合」（本文同筆力）と打付書き。内題は「貞永元八月十五夜歌合」。料紙はやや薄手の斐楮交漉紙。

墨付一五丁。遊紙前後各一丁。字面高さ約二三・三糎。每半葉一行、歌一行書。本奥書「細川持之以秘蔵本書寫校合畢／

弘治元年乙卯如月吉辰（一五ウ）。印記は「直郷之印」（一オ右下・大方朱）・「中川／文庫」（一オ右上、大方朱）。

改丁箇所である十八番右より手が異なるようである。奥書に名が見える、細川持之（嘉吉二年（一四四二）没・四十三歳）は、六代將軍足利義教の代に管領を勤めた武將で、『新統古今集』に四首入集しているように歌人としても知られた人物である。弘治元年（一五五五）はその没後のことであるから、「秘蔵」というのは生前にということなのであろうが、それ相応の古写本であったのであろうか。本歌合には書写奥書はもとより、本奥書を有する伝本も殆ど無く、伝来や系統を考える上でも、極めて貴重な情報である。校本に明白なように、次掲の一本の

親本である可能性は極めて高い。

また、印文の直郷は肥前鹿島二万石第六代当主鍋島直郷（明和七年（一七七〇）没・五十三歳）。前々稿でも述べたように、望月長孝の流れを汲む風絃堂長賢（駕河申也）を和歌の師とし、その元文三年（一七三八）の死の後その蔵書を引き取ったというが、本書の書写時期は直郷よりも前であるので、本書もその内の一冊なのであろうか。また、直郷の祖父直条は、その叔母が前述の松平忠房夫人であったこともあって、鳥原の松平文庫と中川文庫には、本稿（四）で対象とした『仙洞十人歌合』の如く、本文的に極めて近い関係にあると思われるものも目立つが、本歌合に関しては、直接的な関係は認められない。猶、中川文庫本は現在祐徳博物館に保管されている。

祐徳稻荷寄託中川文庫蔵（六・二一一・二八五）本

〔江戸前期〕森彦太郎写 一冊〔略称「中」〕

袋綴。上藍・下紫の雲紙表紙（二六・八×二〇・六糎）。左肩に「貞永元八月十五夜歌合」（本文同筆力）と打付書き。内題は「貞永元八月十五夜歌合」。料紙は薄手の斐楮交漉紙。墨付一五丁（裏見返し含まず）。遊紙なし。字面高さ約二四・一

糎。每半葉一行、歌一行書。本奥書「細川持之以秘藏本書寫校合畢／弘治元年<sup>乙卯</sup>如月吉辰」（一五ウ、「吉辰」の左傍に鉛筆で「三百八十年前」と書入れあり）、書写奥書「森彦太郎写」（裏見返し左下）。印記は「西湖麈ノ之蔵書」（一才右下・大方朱）・「中川ノ文庫」（一才右上、大方朱）。

森彦太郎については知るところがない。「一カ」等と同筆の校訂書入れが目立つが、その箇所は殆どが、前掲本の問題があたり読みづらい箇所であることからしても、本書はその転写本であろう。印記の前者は中川文庫本に折々見かけるものであるが、主を知らない。

東京大学附属図書館蔵（E三一・一六四二）本

〔江戸中期〕写 合一冊〔略称「東」〕

袋綴。錦色地雷文繫小菊花文空押表紙（二九・〇×二〇・九糎）。中央の素紙題簽（二三・七×二・七糎）に「名月哥合」（別筆力）とあり。内題は①「貞永元八月十五夜 判定家」・②「戀十五首<sup>尺阿</sup> 建仁二九月十三夜」・③ナシ。料紙は質目のはっきりした漉返紙。見返しは本文料紙より厚手で墨色の薄い漉返



紙。墨付①四・②三・③二四の計三二丁。表始り。遊紙前一後二丁（剥がれた見返しを含まず）。字面高さ①約二三・二・②二五・七・③二四・二種。每半葉①一〇・②一二・③二三行、歌各一行書。奥書なし。印記は「大善院藏」（一才右下・楕円朱）。「青洲文庫」（表紙に貼付いたはずの見返し才中央・方朱）。「東京帝／國大學／圖書印」。「名月歌合完一冊」との見出し紙あり。

表紙は医書と思われる内容の反故を用いる。一冊通して歌本文は漢字平仮名交り、判詞・注記等は漢字片仮名交りで記される。片仮名書きは線も細くやや小字。あるいは筆を変えて記すか。①は一番・三（以下省略）・四・六・九・十左・十三・十五・二十一・二十三左・二十七・二十八・二十九・三十二のみの抜書で、左歌のみの場合は判詞も関係部分のみの抄書。②も二十二首の抜書。③は「一みよしのは花見し春の気色かはしくる、秋のたくれの空／霞かは花鶯にとちられて春にこまれる宿のあけほの／コレラノカハ、ノミカハト云テニヲハ也」以下、一つ書き二四七条よりなる歌学書。

「清洲文庫は、甲府の和紙問屋であった、渡辺寿（号桃廬屋）

信（号青洲・明治四十四年（一九〇一）没・七十三歳）・沢次郎（号春英）の三代に亘る収書で、東京大学附属図書館に約三万冊が所蔵されている（『近代蔵書印譜 四編』青裳堂書店、平九）。

「大善院」は、仏光寺六院家の一である京都下京区在の真宗寺院が比較的著名ではあるが、同名の寺院は多く、この蔵書印が何処の大膳院のものであるか特定出来ない。

（以下続稿）

《附記》翻刻を許可下さった前田育徳会尊経閣文庫、貴重な資料の閲覧をお認め下さり、また閲覧に際して御高配に与った井上敏幸先生を始め、明治大学中央図書館・慶應義塾図書館・賀茂別雷神社・山口県立図書館・宮内庁書陵部・東海大学附属図書館・熊本大学附属図書館・神宮文庫・島原図書館松平文庫・国立公文書館・篠山市青山歴史村・祐徳博物館・国文学研究資料館並びに御担当の各位と、貴重な御架蔵本の調査をお認め下さった久保田淳先生と高城功夫先生に、篤く御礼申し上げます。

《附載校本》

凡例

一、本校本は前田育徳会尊経閣文庫蔵（一三・五六）本一帖を底本として作成したものである。

一、底本の翻字並びに比較した本の異同箇所（翻字については、なるべく原本のおもかげをとどめるように努めたが、漢字の字体に付いては現今通行の字体に統一した。）

一、底本の補入・見消ちについては、その結果い従って翻字し、その右傍に「\*」記号を付して、底本の状態を下段に同記号を掲げて説明した。

一、翻字の改行は底本のままとし、改頁の箇所には「□」（表丁）・「□」（裏丁）を付した。

一、歌には通し番号を付した。底本は異なるが『新編国歌大観 第五卷』の番号との異同はない。

一、異同の存する箇所には、底本文の右傍に、異同箇所の番号の通し番号を意味する漢数字を付し、下欄にその番号と、異同を示すのに必要なだけの底本文を摘記し、「…」の記号で繋いで、比較した各本の、摘記した底本と同じ箇所を掲

げた。

一、異同を示すのに用いた、比較本諸本の略号は以下の通り。

- ・前田育徳会尊経閣文庫蔵（一三・五六）本……………〔尊〕
- ・明治大学中央図書館蔵（二〇一・一八七）本……………〔明〕
- ・慶應義塾図書館蔵
- （JL・二A・一〇八七）本……………〔慶〕
- ・久保田淳氏蔵本……………〔久〕
- ・高城功夫氏蔵本……………〔城〕
- ・水府明徳会彰考館文庫蔵
- （巳一三・〇七二七〇）本……………〔彰〕
- ・高山郷土館蔵（和歌部・四五）本……………〔高〕
- ・賀茂別雷神社三手文庫蔵（西・三四七）本……………〔三〕
- ・山口県立図書館蔵（今井似閑本一二九）本……………〔山〕
- ・宮内庁書陵部蔵（五〇一・五九六）本……………〔御〕
- ・宮内庁書陵部蔵（五〇一・五九七）本……………〔書〕
- ・東海大学図書館桃園文庫蔵（桃・三一・二四）本……………〔桃〕
- ・熊本大学附属図書館永青文庫蔵
- （一〇七・三六・七）本……………〔永〕
- ・神宮文庫蔵（三・一〇五六）本……………〔神〕

- ・名古屋市蓬左文庫蔵(六一・二六)本……………[蓬]
- ・宮内庁書陵部蔵(二六六・三四九)本……………[鷹]
- ・島原図書館松平文庫蔵(二三八・七七)本……………[島]
- ・国立公文書館内閣文庫蔵(二〇一・一八七)本……………[内]
- ・篠山市青山文庫蔵(二三四)本……………[青]
- ・歌合部類所収本……………[部]
- ・群書類従巻百九十八所収本……………[群]
- ・祐徳稻荷中川文庫蔵(六・二一二・二五〇)本……………[祐]
- ・祐徳稻荷中川文庫蔵(六・二一二・二八五)本……………[中]
- ・東京大学附属図書館蔵

(E三二・二六四二)抄出本……………[東]

- 一、校合については、見やすさを考慮し、以下のような例はその対象とはしなかった。
- 1、筆者の単純なミスなどに拠ると思われる、補入・見消ち・重ね書き。
- 2、漢字仮名の当て方の違い。但し、意味や読みが異なる可能性が存する場合は、各本の状態を示す為に、校合の対象とした(例「詞・事は」)。
- 3、意味に差が生じない仮名遣いの違い。

- 4、意味に差が生じない漢文体と仮名文の違い(例「被仰・仰せらる」)。

5、助詞「の」「之」の有無。

6、基本的に別字でも訓や音が同じであったり、熟語として同じ読みを有するもの(例「歌・調・哥」・「今夜・今宵」)。

7、題や勝負付などの文字の大小。

8、彰本の「番・左・右」文字の「一」による省略。

一、補入・見消ちの内、諸本の関係を考える際に貴重な情報となると認められるものは、異同本文の後に、「(一)」に入れて状態を示した。

一、本校本で本文の状態を示すのに用いた記号とその意味は以下の通り。

- ・ [■] ……判読不能の文字。
- ・ [□] ……虫損による判読不能文字。
- ・ [(一)] ……推して判読した文字。

一、東京大学蔵本は抄出本であるので、抄出された箇所を、下段の各番の見出し下に「〈東〉」を付して示した。猶、番いではなく左方の歌とそれに関する判詞のみ抄出している場合は、「東」の後に「・左」を加えて示した。

三 調合 貞永元年八月十五夜

題

名所月<sup>三首</sup>

哥人

左方

女房

權中納言定家

前宮内卿家隆

行能朝臣

信実朝臣

頼氏朝臣

有長朝臣

親季朝臣

隆祐

知宗

三位侍從母

右方

民部卿典侍

高倉

実持朝臣

資季朝臣

一 調合了判者 權中納言定家…ナシ(桃東)

二 調合 貞永元年八月十五夜…貞永元年八月十五夜歌合

(祐中)

三 題了名所月…(判者)ノ前ニアリ(祐中)

四 三首…ナシ(祐中部群)

五 哥人…作者(永神蓬鷹島内青部群祐中)

六 (作者一覽)左方を上段に右方を下段に記す(祐

中)

七 女房…女房後堀河院(部群祐中)

八 有長…有家(慶彰内青群祐中)

九 知宗…知家(蓬内青群)、知家朝臣(祐)、知家朝臣

(中)

〇 母…母後成女(部群)

二 典侍…典侍(後堀河院官女(部群) 為家卿女)

三 高倉…高倉八条院官女(部群)

三 少将…少将(濠壁門院官女、少将(濠壁門院官女、左京大夫藤原信実女)

(群)

四 下野…下野(日吉栞直元仲女(部)、下野(後鳥羽院官女、日吉栞直元仲女(群)

五 ナシ…以上一本無之(群)

家長朝臣 中宮少将<sup>三</sup>

下野<sup>二</sup> 兼康

光俊朝臣 源家清

右衛門督為家

判者

權中納言定家<sup>一</sup>

一番<sup>一</sup> 名所月<sup>二</sup>

左勝<sup>三</sup> 女房

1 三笠山ふりさけみれは榊葉のいやとしのはに月はすむらし<sup>四</sup>

右 民部卿典侍

2 龍田山そめてうつろふ梢よりしくれぬ色に出る月かけ

左さかき葉のいやとしのはすかた<sup>五</sup>ことは

非凡俗之所及之由各<sup>六</sup>同申右

上に染てうつろふとをきて下に

一番(東) 一「一番」二番作者「高倉」…ナシ(慶)

二名所月…ナシ(城) 三勝…ナシ(城桃青)

四らし…らん(桃東)、らし(朱で「ん」を見消ちして

傍記)(神)、らし(群)、こし(祐中)

五すかたことは…姿(祐中)

六非凡俗之所及…凡俗之非所及(高)、非凡俗之及所

(祐中) セ一同…一同に(高) ハ上に…上(城)

九うつろふと…うつろふ梢と(尊明慶桃を除く他本)

一〇しくれぬ色と…しくれぬと(桃永神蓬鷹島内青部

群祐中)

しくれぬ色といへることはりかなはずや

侍らん今出る月の色をよめるよし」

右方申其難侍らすとも左非同

日之論為勝

二番

左持

権中納言定

3 神風やみもすそ川の清ければ空行月も光そへけり

右

高倉

4 みても又誰にかたらん秋の夜の浦かせさゆる住の江の月

みもすそ川月の光そへたるよし哥

合にかたんためによめるうたかひ侍しかと

川の名をよまんことに勝へきにも侍らす」

哥のさまめつらしからす侍らん住江月

をめて、誰にかたらむと侍るも景気

二 かなはずや…かなはず(桃神蓬鷹島内部祐中)、ならず(青)

三 今出る…といつる(御書蓬鷹島内東)、と(桃)、とい

へは(神) 三申…陳申(尊明慶を除く他本)

四 侍らす…侍らむ(中) 一五とも…しかれとも(彰)

二番 一持…ナシ(城桃青)

二 権中納言定…権中納言定家(久城彰高御書永神鷹

島内青部祐中)、定家(蓬)、権中納言(群)

三 月も…月の(桃神蓬鷹島内青部群祐中)

四 そへたる…そへ(三山永鷹島)、そへる(御書神蓬)、

そへ(候)(桃)、そへける(内青部群祐中)

五 かたん…かたらん(青) 六 うたかひ…うたかひな

く(彰) 七 侍しかと…侍を(桃)、侍しを(永)、侍

しを(神蓬鷹島内青部群祐中)

八 川…いつれ(彰高) 九 勝…侍(神蓬)

\* 「に」右傍より補入 一〇にも…に(彰高)

二 哥…あき(桃永神蓬鷹島内青祐中) 三 めつらし

らす…めつらしからや(城)、めつらしくからす

おもひやられ侍れは可為持之由申

三番

左持

前宮内卿

5 光そふ木間の月におとろけは秋も半のさやのなか山

右

実持朝臣

6 夕なきにあかしのとよりみわたせはやまとしまねを出る月影

さやの中山の旅にいて、木間の月のひかり

そへたるに秋の半をおとろける心詞めつらしく』

有興之由各申あかしのとよりやまとしま

みゆといへる古哥の心にて新月の出る

にむかへるすかた詞けたかく聞え侍れは

又為持

四番

左

行能朝臣

(御書) 一三侍れは…て(桃神蓬鷹島内青部群祐中)

二可為…為(彰高城)、可(部) 一五之由申…申(鷹)

三番(東) 一持…ナシ(城桃青)

二前宮内卿…前宮内卿家隆(城彰高永神鷹島内青部

祐中)、家隆(蓬) 三ナシ…新勅撰(慶久)、新勅

(部群) 四秋も…秋の(御書) 五さや…さよ(桃

永神蓬鷹島内青部群東)、さ夜(祐中) 六ナシ…

同(慶久部) 七なきに…なきの(城を除く他本)

八とより…とまり(高) 九みわたせ…なかむれ(城)

一〇さや…さよ(神蓬部群) 二たるに…たる(彰)

三半を…半(三山)、半も(桃神蓬鷹島内青部群祐中)

三とより…とまり(高) 四みゆと…みゆると(彰高

永神蓬鷹島内青)

一五いへる…いへり(御書)

一六古哥…古今の哥(彰)、左哥(山) 一七新…聊(御書

桃永神蓬鷹島内青祐中) 一八出るに…いつと(彰)、

いつると(高) 一九持…勝持(明)、勝(鷹)

四番(東) 一しほの…しほに(神蓬鷹島)

二ひるに…ひるに(祐)

7あかしかた今夜は月もみつしほのひるにかはるは哀なりけり

右勝

資季朝臣

8天原雲井にちかき富士のねは月すめとてや雪もさえけん

左こよひは月もみつしほといへる風情尤

宜之由申侍き右方申云まことに心ある

哥とは聞え侍をあはれなりけりといひ

はてたる詞くちおしくや侍らんちかき世

の哥にけしきの杜のした風に立

そふ物は哀なりけりといへるにおかしう

聞え侍るよし申いたし侍しかとこの哥

ゆるされ侍らさりしかは雲井にちかきふ

しのね山のさまもをよひかたけに侍

れは可勝之由被定

五番

三かはるは…かはれは(桃永神蓬鷹島内青部群祐中)

四勝…ナシ(城桃島) 五すめ…すむ(桃)、すけ(蓬)

六さえ…消(高)きえ(書)

七左…左は(高)、左に(桃永神蓬鷹島内青部群祐中)、

右(東) 八月も…月の(明慶久城御書東)

九心ある…有心(神蓬群) (侍を…侍れと(桃神蓬

部群)、侍れと也(内)、侍れとも(青祐中)

二詞…こと(桃)

三ちかき世…ちかき(城)、ちかきかせ(祐)

三けしきの杜…聞へ侍る…ナシ(祐中)

二四ことに…こと(彰)、ことは(城)

二五侍るよし…侍かし(城) 二六侍しかと…侍し事(東)

二七ゆるされ…猶ゆるされ(他本)

二八侍ら…ナシ(桃) 二九山のさまも…哥のさま(桃

永神蓬鷹島内青部群祐中)、山ノ(東)

三〇れは可勝之由被定…ナシ(東)

五番



左 信実朝臣

9 夜半の月なたかの浦の浪の上に秋は半といかにすむらん

右勝 家長朝臣

10 いくにもふりさけ今やみかさ山もろこしかけて出る月かけ

名高浦の秋の半風情おかしくは侍れ

とふりさけ今やみかさ山もろこしかけてと

いへる漢家本朝をかねて月の影いたらぬ

所なくつかうまつれるよし満座褒美

為勝

六番

左 頼氏朝臣

11 くもりなき明石の浦のならひにも秋のこよひの月はみえけり

右勝 中宮少将

12 とふ人もあらしとおもふを三輪の山いかにすむらん秋のよの月

一 上に…うへ(神蓬鷹島)

二 勝…ナシ(城桃青)

三 ナシ…新勅(慶久部群)

四 今…いさ(神)

五 秋の半…秋(桃神蓬鷹島内青柘中部群)、秋は(水)

六 おかしくは…おかしく(彰桃永神蓬鷹島内青部群 柘中)

七 いへる…いつる(柘)

八 をかねて…を(彰高桃永神蓬鷹島内部群、

かけて(青)、を(柘中)

九 まつれる…まつる(桃永神蓬鷹島内青部群柘中)

〇 勝…ナシ(青)

六番(東)

一 浦の…うらに(桃)

二 みえ…みて(群)

三 勝…ナシ(城桃青)

四 ナシ…続後撰(慶久部群)

五 おもふを…おもふ(彰高御書桃神蓬内青柘中)

くもりなきあかしの浦も猶秋のなかはの

月ことなるよしことよろしく聞え侍る

を三輪の山いかにすむらんどいへるあらぬ

さまに艶にゆへありて聞ゆるよし各

申左の哥ならひにもといへる詞いか、など

申人々侍て右勝とさためらる』

七番

左

有長朝臣

13 おとこ山秋の半の法の庭月は木間の光のみかは

右勝

下野

14 くもりなき月をみかさの山のはに秋の半の影そさしそふ

放生会今夜儀嚴重に聞え侍しかと

くもりなき月をみかさの山秋の半の影さし

そへたる心もそのゆへ侍るへし哥のさまも

六よし…へし(高) 七聞え侍る…聞侍る(久)

八左の歌…左(東)(判詞此処ヨリ)

九詞…こと葉(城高)、ことは(彰桃永鷹島内)、事は

(青)、詞は(祐中)

一〇人々…人(桃永神蓬鷹島内青部群祐中)

二侍て…侍(彰)

三勝と…勝に(桃群)、「と」以下ナシ(東)

三らる…られ(部)

七番 一有長…有家(桃永神蓬鷹島内青群祐中)

二木間…こよひ(御書群)、このよ(高桃永神蓬鷹島

内青部祐中) 三勝…ナシ(城桃青)

四月を…月は(桃永神蓬鷹島内青部群祐)、月は(中)

五放生会…放生(城) 六今夜…夜(青)、今宵(祐)

七儀…義(祐中部) 八聞え…聞は(神)

九侍しかと…侍を(桃永神蓬鷹島内青部群祐中)

一〇山…ナシ(桃永神蓬鷹島内青部群祐中)

二影さしそへたる…かけさしそへたる(高)、影をさ

しそへける(桃永神蓬鷹島内青部群祐中)

よろしきよし各申て為勝

八番

左勝 親季朝臣

15 みかさ山千代の光をさしそへて雲井をてらす秋のよの月

右 兼康

16 いく秋の空行月をやとすらんしほくむあまの袖のうらなみ

しほくむあまの袖の浦浪ことよろしく

聞え侍れとみかさ山の千代の光雲井を

てらす月不及是非為勝

九番

左 隆祐

17 お花さくまの、入江のたよりにもてる月なみに今夜をそしる』

右勝 光俊朝臣

18 雲をくるむこ山おろし吹にけりあなの湊にはる、月かけ

三心も…こ、ろ(高) 二三ゆへ…ゆえ(青)

四各申…申(彰)

八番

一勝…ナシ(城桃青)

九番(東)

一勝…ナシ(城彰桃青)

二をくる…わたる(桃永神蓬鷹島内青祐中)

三湊に…みなども(桃永神蓬鷹島内青祐中)

四尋常之…よのつねの(桃)

五句歎…歎(高)、勿歎(御書)

お花さく非尋常之句歎之由申以右

為勝

十番

左持 知宗

19 さくらとも雪とも今はみよしの、山の秋かせはらふ夜の月

右 源家清

20 龍田山月のかつらの下露に秋の半そ色に出ゆく

はらふ夜の月さ、へて聞ゆ月の桂の下

露秋の半の色いうに聞え侍るを似たる

哥ありと申人侍て被処持見

及はすおもひわすれ侍ることはあひた

かひの事に侍るへし

十一番

左持 三位侍従母

六 以右為勝…以為勝(書鳥)、ナシ(東)

十番(東・左)

一持…ナシ(城桃青)

二 知宗…知家(桃内青群)、知家朝臣(祐中)

三 下露に…しらつゆも(城)

四 さ、へて…さえて(桃永神蓬鷹島内青部群祐中)

五 ありと…あこと(青)

六 及はす…をよけす(城彰高)、をとけす(久)

七 おもひわすれ…とひわすれ(彰高)

\* 「侍」は「た」を見消ちして改める

八 侍ること…ぬる事(明を除く他本)

十一番 一持…ナシ(城桃青)

二 万代と…よろつ代も(桃永神蓬鷹島内青部群祐中)

21 万代とみもすそ川のしきなみもすめる雲井の秋の月かけ

右 右衛門督

22 いす、河神代の鏡かけとめて猶曇なき秋のよの月

みもすそ川すめる雲井いす、川神世

のか、み尤為持

十二番

左持 女房

23 かすみゆるかりのはたれの霜の上に月さえわたるあまのはしたて

右 民部卿典侍

24 清見かた月の空にはせきもゐすいたすらにたつ秋のしらなみ

かすみゆるかりのはたれ月さえわたるあま

のはしたて風情景殊勝無双きよ

みかたの月詞すかたすてかたしなど申人々

侍しにや持之由被仰

三 しきなみも…しきなみに(部群)

四 月かけ…よの月(御書)

五 右衛門督…右衛門督為家(城彰高御書永神蓬鷹島

内青部祐中) 六 ナシ…統後撰(部群)

七 猶曇なき…今もくもらぬ(桃)、なをくもりなき

(内部) ハいす、川…五十川(桃) 九 為…可為

(永神蓬鷹島内青部群祐中) 一〇持…勝(高桃)

十二番

一 持…ナシ(城桃青)

二 はたれの…はたれて(桃神蓬内祐中)

三 あまの…秋の(鳥)

四 ナシ…統拾遺(慶久)、統拾(部群)

五 空…雲(内青)

六 たつ…うつ(御書)

七 詞すかた…すかたことは(祐中)

八 かたし…かたき(祐中)

九 申…ナシ(桃)

十三番

左勝

權中納言

25よをてらす三笠の山の秋の月たかき昔の跡もよはし

右

高倉

26水の面にてる月なみのいくかへり今夜にあひぬ宇治のはし姫

左哥ひとつに勝負の事を思てよめる

によりてる月なみになれてとしふる

宇治橋姫心くるしく聞え侍きた、し

今よりのちこよひの勝負にのみならひて

詠社名 仮神威事殊可停止之由

おほせらる

十四番

左勝

前宮内卿

27みやき野のま萩かうへのしら露を玉にしきてもやとる月哉

十三番〈東〉

一勝…ナシ(城桃)

二權中納言…權中納言定家(城高彰永神鷹島内青部

祐中)、定家(蓬)

三月なみ…月かけ(青)

四今夜に…こよひも(城)、こよひは(部)

五姫…立(明) 六左…左(鷹)

セひとつに…ひとへに(他本)

八字治…ナシ(東)

九のち…も(桃神蓬鷹島内青祐中)

一〇勝負…勝負(神)

二につみ…よみ(桃永神蓬鷹島内青部群祐中)

三社名…社各(高鷹)、祐名(祐)、祐名(中)

三反…縦(桃永神蓬鷹島内青)

十四番 一勝…ナシ(城桃青)

二前宮内卿…前宮内卿家隆(城彰高永神鷹島内青祐

中部)、家隆(蓬) 三月哉…月影(高)

右

実持朝臣

28 したくゝる浪もあらはに大井河のせきもかくる月のしからみ

月のしからみめつらしくおかしきよし侍し

かと宮城野の月心すかた勝へきよし

被定

十五番

左

行能朝臣

29 みかのはら山より月の泉河わたりをとをみしく氷かな

右勝

資季朝臣

30 秋の月やとる光し清ければおほろの清水名をもたのまし

わたりをとをみきらしく聞え侍よし申

いたし侍き月のいつみ河さし事に聞ゆる

よし申人有て右哥忍ひやかにいうなり

とて為勝

四くゝるゝくるゝ(彰) 五あらはにゝあらはと(桃)

永神蓬鷹島内青祐中) 六せきもゝせきも(青)

七かくるゝかゝる(御書) ハしからみゝしらなみ

(神彰蓬) 九しからみゝしらなみ(蓬)

〇めつらしくゝナシ(青) 二しかとゝしかとも(桃)

永神蓬鷹島内青部群祐中) 三被ゝらる(三山御書)

らるゝ(祐中) 三定ゝ仰(桃)

十五番(東)

一勝ゝナシ(彰城桃青)

二名をもゝなをも(桃永蓬鷹島内青)、猶も(神祐)

猶も(中)、■をも(東)

三きらゝキレ(東)

四聞え侍よしゝ聞侍るよし(久)、きこゆるよし(城)

きこえ侍り(桃)

五侍きゝ侍るに(久城彰高)、侍て(鷹)

六さし事ゝさしも(御桃神蓬鷹島内青群祐中)、さ、

か(書) 七やかにゝやに(中)

十六番

左勝<sup>一</sup>

信実朝臣<sup>一</sup>

31をしほ山おのへの松の秋風に神代もふりてすめる月影

右

家長朝臣

32 たつ名にはおふの浦なし月さえて秋の半になりもならずも

依今年之潤月秋半依遣之由思へる

所侍れとをしほの山の月哥のさまも

よろしきによりて為勝

十七番

左勝<sup>一</sup>

頼氏朝臣

33 久かたの月の桂の秋かせに雲もかゝらぬあまのかく山

右

中宮少将<sup>一</sup>

34 をちこちの空もひとつに月さえて野鳥か崎に秋かせそふく

月の桂の秋風に雲もかゝらぬ景気哥

十六番

一勝…ナシ(城桃青)、持(御書)

二ナシ…続古(部群)

三神代も…神代に(彰) 四 おふ…あふ(彰)

五 依遣…仍遣(山)、違(書祐中)、依違(城彰高三御

桃永神蓬鷹島内青)、相違(部群)

六 思へる…おかへる(書) 七 所…こゝろ(城)

八 侍れと…侍ると(祐中) 九 をしほ…をし(書)

十七番

一勝…ナシ(城桃青) 二をちこち…遠(江)(蓬)

三空…雲(祐中) 四崎に…さきは(他本)

五風に…かせ(城) 六哥…ナシ(青)

七すかた…すかたも(高)、姿詞(御書)

八かなひて…叶(城) 九各…名(御書)

〇不及右哥…古哥(彰高)、及右哥(青)、右哥不及

(部)、古歌不及(群)



のすかたあひかなひて秀逸と聞ゆるよし

各称美申不及右哥之優劣左為勝

十八番

左

有長朝臣

35 さほかはに月の氷をしきしまのみちあるみよは神やまちけん

右勝

下野

36 はつせ山弓槻かしたもあらはれて今夜の月の名こそかくれぬ

左無其難有道之世尤可然右弓槻

か下もあらはれて月の名かくれぬ心

ことよろしきよし各申為勝

十九番

左持

親季朝臣

37 橘のこしまのくまの川かせにむかしもきかす、める月かけ

右

兼康

二劣…芬(書)

三左為…為左(久城彰高桃永神蓬鷹島内青部群祐中)

十八番 一有長…有家(桃内青部群祐中)

二よは神やまちけん…よそ神やまちけん(久城高)、

よそ神やまつらん(彰)、代を神やまちけん(御書)、

代を神やまつらむ(永神蓬鷹島群祐中)、代を神や

まつらん(内)、代を神やまつらん(青)、代を神や

待らん(部) 三勝…ナシ(城桃青)

四ナシ…続後(慶久)、続後撰(部)

五山…川(高) 六あらはれ…したはれ(群)

七れね…れぬ(桃内)

八之世…之御代(御書)、御代(桃群)、之由(祐)

九尤可…可(彰高) 一〇ことに…とも(城)

十九番

一持…ナシ(久城桃神青)

二のくま…かさき(久城彰)、か崎(高)

三ゆき…雪(中)

38 秋萩の花野の露のゆきすりにぬれてうつろふ袖の月かけ

たちはなのこしまにすめる月秋はきの

花野にうつろふ露いつれとなくおか

しく聞ゆ為持<sup>六</sup>

廿番

左

隆祐

39 あかしかた名におふ浦にすむ月も猶のこりける影をみる哉

右勝<sup>二</sup>

光俊朝臣

40 さらしなやをは捨山の月もなを今夜そ秋の影はそふらん

明石更級之月誉雖同右哥依

下句宜為勝

廿一番

左

知宗<sup>一</sup>

41 よしおらて露なからみんもとあらの萩のうへなるみやきの、月

四 すりに…すりて(鷹島内)、す(かて)青

五 野に…野は(桃鷹島内青)、野の(祐中)

六 為持…ナシ(彰高)、為勝(桃蓬)、仍為持(青)

二十番

\*「に」は「の」を見消ちして改める

一 みる…みつ(高)

二 勝…ナシ(城桃青)

三 誉…拳(永神蓬鷹島)

四 依…ナシ(桃)

二十一番(東)

一 知宗…知家(桃内青群)、知家朝臣(祐中)

二 よしおらて…よ、をへて(彰)

三 あらの…あらは(桃) 四 みやきの…みやまき(鷹)

右勝<sup>五</sup>

源家清

42かこつへき山こそなけれゆらの戸を夜わたる月のゆく末の空

左初<sup>七</sup>五字非尋常之上右ゆらの

とを夜わたる月すかたことは尤<sup>九</sup>宜仍為勝

廿二番

左

三位侍従母

43花のえに露のやとかるみやき野の月にそ秋の色はみえける

右勝<sup>六</sup>

右衛門督

44かゝりける秋のこよひの月よりや浦を明石の名にさためけん

宮城野の月ことよろしく聞え侍れと

右浦をあかしの名にさためけん勝へき

よし被定

廿三番

左勝<sup>二</sup>

女房

五勝…ナシ(城桃青東)

六なけれ…みえぬ(明鷹を除く他本)、見えぬ(鷹)

七五字…五文字(桃神蓬青部群)

八之上ゝ為勝…之詞(東)

九尤…ナシ(桃) 一〇宜仍為勝…ナシ(内)

二十二番

一花のえに…花の、に(久城彰高)

二やとかる…やとりか(三山御書)

三月にそ…月こそ(彰高)

四ける…けれ(彰高)、けり(城三山)

五勝…ナシ(城桃青)

六右衛門督…右衛督為家(彰)、右衛門督為家(城高)

永神鷹島内青部祐中)、為家(蓬)

七秋の…秋は(青) 八月より…つゆより(彰)

九名に…ナシ(桃) 一〇定…仰(桃)

二十三番(東・左(判詞ナシ))

一廿三番…卅三番(久)

45 すまの浦やあまとふ雲の跡はれて浪より出る秋のよの月

右 民部卿典侍

46 いくかへりあまのあまわかための秋とはなしに月をみるらん

右 ことなる難はきこえ侍らねとつねの

事にやあまとふ雲の跡たちならふへき

もの侍らぬよし申て為勝<sup>一</sup>

廿四番

左 権中納言

47 月影は秋の夜なかくすみのえのいく千とせにかあひをひの松

右 高倉

48 里はあれて伏見の秋をきてとへは月こそやとれ浅茅生の露

住 江月又雖募神社之威ふしみの

秋 ことに入幽玄之境仍為勝

廿五番

二 勝…ナシ(城桃青)

三 ナシ…統後(慶久)、統後撰(部群)

四 あまの…すまの(他本)

五 あま…うら人(高)

六 きこえ侍らね…侍らね(久城彰高)

七 事…月(桃永神蓬鷹島内青群祐中)

八 跡…ナシ(桃)

九 為…右(高)

二十四番 一 廿四番…卅四番(久)

二 権中納言…権中納言定家(城彰高永神鷹島内青部

祐中)、定家(蓬)

三 なかく…なから(桃永神蓬鷹島内青祐中)

四 千とせ…ちせ(城) 五 勝…ナシ(城桃青)

六 秋…里(蓬) 七 やとれ…やとの(桃祐中)

八 露…宿(部)

九 ことに…ナシ(高)、月(桃)、村(神蓬鷹島内青)、

月殊(部)、殊月(祐中)

二十五番

左

前宮内卿

49 龍田河もみちはまたき浪のうへに水の秋しる月そさやけき」

右勝

実持朝臣

50 月すまはあたに過ゆく人もあらし今夜はたゆめすまの関もり

もみちはまたき水の秋しるそのこと葉

雖拔群こよひはたゆめすまの関守

猶可勝之由被仰

廿六番

左勝

行能朝臣

51 かすかやま峯の榊葉ときはなるみよの光も月にみえつ、

右

資季朝臣

52 あかしかたかたふく月にまかせてや浪まの影のうらつたふらん」

峯のさかき葉みよの光尤足称美

かたふく月浪まの影本目非各別

一 前宮内卿：前宮内卿家隆（城彰高永神蓬鷹島内青部

祐中）、家隆（蓬） 二 勝：ナシ（桃青）

三 すまは：とまは（御書）

四 こと葉：詞姿（神蓬鷹島内青部群祐中）

五 雖：難（書） 六 拔群：拔秋（久城高）、拔群秋〔群〕

補入（彰）、拔（永鷹島）

\* 「は」は「そ」を見消ちして改める

七 猶：なむ（桃永神蓬鷹島内青祐中）

八 勝：然（神蓬祐中）

二十六番

一 勝：ナシ（城桃青） 二 ナシ：統拾（群）

三 つ、：つる（神蓬）

四 影の：風の（山）、影を（永神蓬鷹島内青祐中）、影

も（部群） 五 足：宜（城彰高）

六 本目：本自（彰高）、本より（御書桃永神蓬鷹島内

部群祐中）、より\*（青）

七 非：非歟（内青）

八 別事：事（久城彰高）、別事歟（桃群祐中）

事以左為勝

廿七番

左

信実朝臣

53 いと、また露をかさねてしらすけのまの、かやはら月そやとれる

右勝

家長朝臣

54 君か代はめて、もめてん秋の月つもれと誰もわかのうちら

左させるあやまり侍らねとしらすけにくし

と申人きこえ侍きつもれとたれもわかのか

浦人すかた詞めつらしくいひしりて

聞ゆるよし各申為勝

廿八番

左

頼氏朝臣

55 しら雲のとはたの浦の山風に空はれまさる秋のよの月

右勝

中宮少将

二十七番〈東〉 一 いと、また…いとまたき(桃永神

蓬鷹島内青祐中)、いと、また(部) 二 露…つき

(桃) 三 かやはら…はら(祐)、はら(中) 四 勝…

ナシ(城桃青) 五 左…ナシ(桃永神蓬鷹島内青)

六 あやまり…あやまち(桃永神蓬鷹島内青祐中)

七 侍らねと…侍ラネハ(東)

八 にくしと申人…き、にくしと申人(彰高)、にく、

と申人(書)、申人(桃永蓬鷹島内)、申人(神)、申

人(青)、いかにやと申人(部)、いかにやと申人

(群)、いかにやと申人(祐中)

九 きこえ侍き…きこゆれと(桃祐中)、聞え(永神蓬

鷹島内青) 一〇 つもれ…つれ(神)

二 聞ゆるよし…侍ヨシ(東) 三 為勝…ナシ(東)

二十八番〈東〉 一 浦…山(部群祐中)

二 空…くも(城) 三 まさる…わたる(久城彰高)

四 勝…ナシ(城桃青)

五 かくる…かゝる(桃神蓬鷹島内青祐中群)

56 なみかくるなにはの里のあしまくら月みんとてやむすひそめけん

左上句き、なれぬ事に侍れはあしまくら

勝へきよし定申

廿九番

左

有長朝臣

57 もみちする月の桂の川なみにひかりは花と散まかひつゝ、

右勝

下野

58 もしほ焼心あるあまの夕けふり月にはたてす松かうらしま

左下句便なく侍けり右夕けふり

たてぬ心よろしきよし申て勝

卅番

左

親季朝臣

59 なにはえやしほみちくらし久かたの月吹よするおきつ秋かせ

右勝

兼康

六里…(よ)と(彰)、ま(高)七みん…見る(永神)

蓬鷹島内青部群)、み(祐)、み(中)

八上句…上(中) 九事に…こと葉(彰高)

○あしまくら…蘆(祐)、蘆(中)

二定申…各申(東)

二十九番(東)

一有長…有家(彰城桃内青群祐中)

二ひかりは…光の(東) 三つ、…ゆく(東)

四勝…ナシ(城桃青)

五もしほ焼し兼康…(一頁分重複して写す)(桃)

六心…□、ろ(彰) 七便…たまり(高)

八侍けり…侍ける(鷹島)、侍り(部群祐中東)

九よろしき…しき(中)

○勝…為勝(御書祐中)、ナシ(東)

三十番

一親季朝臣…親季(神蓬鷹島内青)

二よする…おくる(青)

60 いくめぐり秋の今夜を契るらんみかさの山にすめる月かけ

右 哥尤宜為勝

卅一番

左持 隆祐

61 なかき夜のかきりもみえすむさし野や山なき空にすめる月かけ

右 光俊朝臣

62 すみわたるひかりもきよし白妙のはまなの橋の秋のよの月

白妙のはまなのはし景氣景ことに聞え

侍るにやむさし野の山なき心は近年

おほく聞え侍れとことなる難は侍らね

は為持

卅二番

左 知宗

63 あまの戸のひとつにみゆる浪のうへに月まつしまの秋の舟人

三 勝…ナシ(城桃)

四 山にすめる…山にすめる(御書)、山をいつる(桃)

永神蓬鷹島内青部群祐中)

三十一番

一 持…ナシ(城桃青)

二 みえす…みえて(城)

三 空…くも(彰)

四 ナシ…新勅(慶久部群)

五 ことに…ナシ(桃神蓬鷹島内青祐中)

六 心は…心(彰高)、ころは(桃)

七 おほく…おほく歟(桃)、おほくそ(祐中)

八 持…勝(久城御書桃鷹島)

三十二番(東)

一 知宗…知家朝臣(桃群祐中)、知家(青)

二 ひとつに…ひとつ(御書)



右勝<sup>三</sup>

源家清

64 たえすゆく秋のみや川いくちよもきよきなかれにすめる月影

左哥詞<sup>四</sup>いうに侍を当時月にむかはぬ

にや秋の宮川尤可然<sup>五</sup>為勝

卅三番

左勝<sup>一</sup>

三位侍従母<sup>一</sup>

65 ふりにける哀も月にすみのえの松に夜ふかき秋のしほかせ

右<sup>三</sup>

右衛門督<sup>三</sup>

66 いせしまよとをきひかたの塩風<sup>五</sup>にひかりみちたる秋のよの月

とをきひかたに月のひかりみちたるよし<sup>六</sup>

心は侍れと住江の松に夜ふかき

月景気<sup>七</sup>ことにおもひやらる、よし

申て為勝<sup>一</sup>

(半葉アキ)

三 勝…ナシ(城桃青)

四 いうに…いうには(明慶久彰高三山御書東)、いかには(城)

五 為勝…ナシ(東)

三十三番

一 勝…ナシ(城桃青祐)

二 かせ…かは(久) ≡ 右…ナシ(島)

四 右衛門督…右衛門督為家(城彰高永神鷹島内青部祐中)、為家(蓬)

五 塩風…しほかれ(慶三山御書永神蓬鷹島内青部群祐中) 六 ひかたに…ひかたの(桃)

七 みちたる…たる(明)

八 よし…(以下ナシ)(内)

九 侍れと…侍れは(高)

一〇 ことに…ことは(城)

二 やらる、…やらる(神蓬島)、やる(青祐中)

勝<sup>一</sup>負

左方

女房 勝<sup>二</sup>持<sup>一</sup>

権中納言定家 勝<sup>二</sup>持<sup>一</sup>負<sup>一</sup>

前宮内卿 勝<sup>二</sup>持<sup>一</sup>負<sup>一</sup>

行能朝臣 勝<sup>二</sup>負<sup>一</sup>

信実朝臣 勝<sup>二</sup>負<sup>一</sup>

頼氏朝臣 勝<sup>二</sup>負<sup>一</sup>

有長朝臣 負<sup>三</sup>

親季朝臣 勝<sup>二</sup>持<sup>一</sup>負<sup>一</sup>

隆祐 持<sup>二</sup>負<sup>一</sup>

知宗 持<sup>二</sup>負<sup>一</sup>

三位侍従母 勝<sup>二</sup>持<sup>一</sup>負<sup>一</sup>』

右方

民部卿典侍 持<sup>二</sup>負<sup>一</sup>

高倉 勝<sup>二</sup>持<sup>一</sup>負<sup>一</sup>

実持朝臣 勝<sup>二</sup>持<sup>一</sup>負<sup>一</sup>

資季朝臣 勝<sup>二</sup>負<sup>一</sup>

家長朝臣 勝<sup>二</sup>負<sup>一</sup>

中宮少将 勝<sup>二</sup>負<sup>一</sup>

下野 勝<sup>三</sup>

兼康 勝<sup>二</sup>持<sup>一</sup>負<sup>一</sup>

光俊朝臣 勝<sup>二</sup>持<sup>一</sup>

源家清 勝<sup>二</sup>持<sup>一</sup>

成績一覽

一「勝負」以下ナシ…(久城彰高三山御書桃永神蓬鷹

島内青東)、(別種ノ一覽アリ)(部群)、(又別種ノ

一覽アリ)(祐中)、(各々(部)(祐)ノモノヲ後

掲シ、(群)(中)の校異ヲ示ス)

二持…持(明慶)

三定家…ナシ(明慶)

〔部の成績一覽〕

部成績一覽  
一ナシ…以下一本無之(群)

女房	勝二持一	民部卿典侍
定家卿	勝一持一負一	高倉
家隆卿	勝一持一負一	実持朝臣
行能朝臣	勝一 負二	資季朝臣
信実朝臣	勝一 負二	家長朝臣
頼氏朝臣	勝一 負二	中宮少将
有家朝臣	負三	下野
親季朝臣	勝一持一負一	兼康
隆祐	持一負二	光俊朝臣
知家朝臣	持一負二	源家清
三位侍従母	勝一持一負一	為家朝臣

〈祐の成績一覽〉

勝負

左

女房

勝二 持一

定家卿

勝一 持一 負一

家隆卿

同 同 同

行能卿

同 同 同

信実朝臣

同 同 同

頼氏朝臣

同 同 同

有家朝臣

同三

親季朝臣

持一 同 同

隆祐

持一 同 同

知家朝臣

同 同 同

三位侍従母

勝一 同 同

祐成績一覽

一ナシ…同(中)

二…一(中)

右

民部卿典侍

高倉

勝一  
同  
同

実持朝臣

同  
同  
同

資季朝臣

同  
同  
同

家長朝臣

同  
同  
同

中宮少将

同  
同  
同

下野

同  
同  
同

兼康

同  
持  
同

光俊朝臣

同  
同  
同

源家清

同  
同  
同

為家朝臣

同  
同  
同

持  
負